

レポーター：学芸員の松村さんです。よろしくお願いします。

学芸員：よろしくお願いします。

レポーター：こちらはこういった衣装になるんですか。

学芸員：これはですね、ドンザといいます。あの漁師さんの昔の仕事着です。

レポーター：んー、昔の仕事着。すごく細かい刺繍で作られているんですけど、これ刺し子ですよ。

学芸員：これ刺し子ですね。

レポーター：普段の仕事着にこんなに細かい刺繍をされていたんですか。

学芸員：昔は今でいう雨合羽とかオーバーコートとかそういったものはありませんでしたので、布をたくさん重ね合わせて、それを刺し子にして縫い合わせて防寒着にしていたんです。

レポーター：へえー、私、刺し子って刺繍のためだけかと思っていたんですけど。

学芸員：必ずしも、今みたいに、飾りの為のものではなくて、生活に根差したホントに寒さから体を守るためのものでした。

レポーター：へえー、何枚もこれは重ねて、細かく刺繍をして、補強をしているような。

学芸員：そうですね。

レポーター：洋服になるんですね。

学芸員：よく見てもらったらわかるんですけども、ほんとに細かい刺繍になってます。

これはですね、だいたい3枚とか4枚にも布を重ね合わせて、そこにいくつもいくつも針を刺して行って作った文様ですね。

レポーター：へえー、普通に3枚4枚重ねるのが主流になっていってるんですか。

学芸員：だいたい防寒着の場合は、やはり2枚以上、多いものは4枚5枚というものもありますけども、必ずしも分厚い物だけではなくて、もっと薄くて、ほんとに飾りみたいな刺繍をする場合もありました。

レポーター：へえー、そうなんですね。じゃあ、その厚さによってその着てた方が寒がりなのかそうじゃないのかというの。

学芸員：あ、それもわかるかもしれませんね。

レポーター：わかりますよね。

学芸員：こちらを見てもらうとわかるんですけど、この辺りはすごく細かな刺繍がしてありますけども、下の方はウサギさんの絵が描いてあります。これなんかはどう見ても仕事着ではありませんよね。

レポーター：そうですね、とても華やかですよ。

学芸員：これ多分ね、晴れ着として着たものではないかと思ってます。

レポーター：えー、晴れ着でもドンザが使われていたんですね。

学芸員：そうですね。普段仕事着で使っているものなんですけども、漁師さんをすごく象徴するものとして、ドンザというものがありました。で、このウサギなんですけども、福岡には一つ伝説がありまして。

レポーター：え、どんな伝説。

学芸員：ウサギの伝説があつてですね。昔、鎌倉時代のお坊さんで大応国師という人がいて、その人が中国から帰るときに海がしけたんですね。

レポーター：はい。

レポーター：それで、もうだめかという風にあきらめたら、中国から連れて帰ってきたウサギが海の上を走って、そこがぽつと波がなくなって無事に福岡に着いたというような伝説があるんですね。

レポーター：えー。

学芸員：ですから、もしかするとそういった伝説をもとに、えー、このドンザを作った人はこのウサギの絵を描いたのかもしれないですね。

レポーター：そうですね。漁師さんで。海を守ってくれる安全を祈願してという意味が込められているんでしょうね。きっと。

学芸員：そうですね。

レポーター：どういったときに、晴れ着ということで着られてたのかわかるんですか。

学芸員：はっきり、わからないんですけども、めったにないような大きなお祭りの時なんかに着てたようです。

レポーター：そうなんですか。このドンザはいつの時代に作られてたものなんですか。

学芸員：主にですね福岡のドンザは明治時代の中頃から昭和にかけて作られたものが多いようです。

レポーター：結構、最近なんですか。

学芸員：そうですね。もともと、えー、こういったものというのは、木綿を重ねて作るんですけども、それが自由に使えるようになるような経済状態があつたのではないかという風に考えております。

レポーター：えー、でも幾度に重ねて、昔のその着物などをリサイクルして作っていたというとてもエコな考え方ですよ。

学芸員：そうですね。

レポーター：ドンザというものが、福岡にあつたということを私初めて知りました。

学芸員：あ、そうですね、ね。是非ですね、又こういったものをいろいろ見て頂いて福岡の歴史を学んで頂けたらというふうに思います。

レポーター：はい、ありがとうございました。

学芸員：はい、ありがとうございました。